

田宮高磨さんを追悼する会

(大阪)



1996年3月2日

●経 歴●

- 1943年 1月29日、岩手県に生まれる。
- 1962年 大阪府立四条畷高校卒業。2年と3年進学クラス同級生の話では、特に数学が得意だった。クラブ活動はしていない。自分から個人的なことを話すタイプではなかった。
大阪市立大学経済学部入学。詩吟部に入部。音痴のため下手で、後輩に抜かれるのを悔しがっていた。1年の秋ごろ、現代思想研究会に顔を出し、社会学同と接触するようになる。
- 1963年 社会学同夏の合宿に参加、市大支部同盟員となる。プロゼミでは『資本論』第一巻を読んだ。この年の秋、大学祭前夜祭が生協食堂で準備されていた時、当時流行していたモンキーダンスの音楽が流れ、たまたま居合せた学生服の田宮が、設置された舞台の上で何人かの学生と一緒に踊り、汗びっしょりになって「この踊りオモロイヤンけ」といっているのを、大学祭実行委員長が目にし、「新しいタイプの活動家が出てきた」と思ったという。
- 1964年 市大全学自治会委員長。ベトナム反戦、日韓条約反対闘争など、学生運動を指導。
- 1966年 10月、共産主義者同盟（ブント）加盟。
- 1967年 市大を卒業。ブント同盟員として、東京で労働運動、地区反戦を組織、「関西弁でオルグってる」と評判になる。
- 1969年 共産主義者同盟赤軍派を塩見孝也と結成、軍事委員長となる。
- 1970年 3月31日、「よど号」ハイジャック、朝鮮民主主義人民共和国へ。
- 1972年 5月1日、平壤（ピョンヤン）で記者会見、赤軍派路線を総括し、新たな出発を宣言。
- 1980年 『祖国を離れて十年』を発表。
- 1981年 機関誌『日本を考える』発行。同編集委員会代表。
- 1983年 国際ジャーナリスト大会に同代表として参加。
- 1985年 当時の首相中曽根に帰国に関する書簡を送る。
- 1988年 「尊憲」運動を提唱。
- 1990年 『日本を考える』編集委員を解消し、「日本の自主と団結のために！」の会を結成、代表となる。理論誌『自主と団結』、通信『お元気ですか』

を発行。

1995年 11月30日、心臓麻痺で急逝、享年52歳。

●著 書●

『日本を考える三つの視点』 83年

『わが思想の革命』 88年 新泉社

『飛翔二十年』 共著 90年 新泉社

『社会主義国で社会主義を考える』 90年 批評社

ロングインタビュー『祖国と民族を語る』 田宮高麿・高沢皓司 批評社

遺稿『民族論』(未完) 96年 「日本の自主と団結のために！」の会編

紫翠会出版(京都)

●新聞雑誌掲載記事●

80年7月号『使者』 「祖国を離れて十年 ピョンヤンからのメッセージ」

81年5月号『国際労働運動』 「チョンソンからのアピール よど号事件首謀者の手記」

81年12月号『月刊PLAYBOY』 「ハイジャックは実は二度目で成功した」

83年7月29日号『アサヒグラフ』 「田宮高麿らが北朝鮮で大いに語った」

85年6月号『話の特集』 「日々の流れを惜しんで」(世界ジャーナリスト大会での演説)

88年7月号『婦人公論』 手記「祖国の母へ！」

88年7月号『文藝春秋』 「赤軍派からの停戦提案 われらは祖国への帰国を決意した」

90年7月20日号『朝日ジャーナル』 「亡命二十年目の帰国協議申し入れ」

91年9月23日～28日付『朝日新聞』 「それから」(単行本に収録)

94年1月号『GQ Japan』 「民族問題の本を刊行し、妻子に祖国の土を踏ませます」

※表紙の写真は、『フライデー』1995年12月22日号から借用

そして最後に確認しよう。

“われわれは明日のジョー”である。

1970年3月30日 午後10時30分

田宮高磨

昔者には色々心配をやり
二連戒をおやりしました。
それにもお陰様各々各自式に
しつぷり生きこへようを知って
嬉しく思っています。
私も例の如く大まか書くと
おこなう段張つていなり
いつの日かお会いを再会し
まよやを期待してつづ
は之をも之れへ長生を
こ下さい。

田宮高磨

95年6月、大学時代の友人に託された日本の友人たち宛ての色紙

式次第

1部 報告と挨拶 午後2時～午後3時

- 一 開会の辞
- 一 挨拶
- 一 報告
- 一 ビデオ 「追悼田宮高麿」
- 一 追悼の挨拶
- 一 感謝の挨拶
- 一 閉会の辞

2部 在りし日を偲んで 午後3時～5時

食事（立食）しながらスピーチ

* 懇親会 会場別記参照

「新末広」 06-691-4787

会場での撮影は当会記録係を除き、一切ご遠慮ください。

田宮高麿同志の逝去に際しての訃告

日本の自主と団結のために！の会、代表、田宮高麿同志は、過労による心臓麻痺のため1995年11月30日、午前4時、52才を一期に逝去致しました。

田宮高麿同志は、日本の自主、民主、平和のために、その心臓の鼓動が止まる瞬間まですべてを捧げて闘い、祖国と人民、民族の誇り高き息子としての生を全うしました。

今日、祖国が日本自主化のための闘争を力強く前進させることを要求しているこの時にあって、田宮同志を失ったことは、祖国とわれわれにとって大きな損失であり、悲しみであります。

同志は、正義と真理に燃える青年学生の一人として60年代に学生運動に参加し、反安保、ベトナム反戦、学園闘争そして労働運動の責任的位置にあって学園で、地域、職場で、そして街頭で青春の情熱をすべて捧げ闘いました。

同志は何よりも情熱的かつ卓越した思想理論家でありました。1970年、「よど号」で渡朝して以降、同志は、祖国と人民に捧げる献身の環を日本と日本人民のための主体的な思想、理論の探求に求めました。同志は、人間中心、人民中心のチュチュエの真理を体得し、日本人民と民族の自主性と団結への要求を擁護実現する思想と理論を探求し、民族擁護、民族至上の思想、理論を創造し、現代帝国主義の侵略思想、グローバリズムを打破する闘争の旗、国と民族を愛するすべての日本人民の団結の旗印、自主愛族の思想を提起することによって、祖国と人民、民族の前に大きな思想理論的貢献をなしました。

同志は、また愛と信頼の政治哲学を信奉し、人の心を知り、心を動かす卓抜した政治家、政治活動家の模範を示しました。

同志はまた、崇高な国際主義精神と革命的義理で帝国主義の攻撃から社会主義を擁護し、日朝友好親善に多大な足跡を残しました。

われわれのもっとも親しい同志であり、師であり兄であり父であった同志、田宮高麿同志の心臓はその鼓動を止めても、その慕わしい名と変わらぬ笑顔は、われわれの胸に永遠に生き続け、同志が半世紀の生涯に祖国に献げた業績は、祖国の歴史とともにさらに輝きを増すであります。

1995年12月1日 日本自主と団結のために！の会

遺族よりのあいさつ

もり よりこ
田宮高麿氏妻 森 順子

今日は、お忙しい中、こうして田宮の追悼集會に参席して下さった皆様に心からのお礼を申し上げます。東京に引き続き、田宮縁の地である大阪で、しかも田宮の母校である大阪市立大学で追悼會が開かれると知り、私も子供たちもうれしく思っています。

また、心温まる数々の弔意文、お電話をいただき本当にありがとうございました。どれほど、励みになったか知りません。

田宮がこんなに急に何の前触れもなく逝ってしまうなど誰が思ったでしょうか。今思えば、あの時こんなふうにしてあげればよかった、あの時もっと素直に田宮の批判を受け入れるべきだった、なぜ、もっと良く助けてこなかったのかなど、後悔することばかりです。

ようやく私も現在、起ち上がらなければならないと思うようになりました。これも日本の皆様とここにいる同志たちのおかげです。私は日本の皆様から頂いた弔意文を何回も読み返しました。田宮と私たちを愛してくださり、心配してくださる皆様の熱い同胞愛がこめられている弔意文は、私をして、田宮を亡くして流した悲しみの涙を、皆様のあつい情に感謝するありがたさと感謝の涙、力と勇気を奮い起こす涙にかえました。それは日本の皆様の情なしには生きていくことはできず、自身が日本の皆様に支えられているという実感をさらに強くしてくれるものでした。

これまで、田宮がいてこそ私たちがあり、田宮がいてこそ私たちは異国の地にあっても日本のために一つの心で闘ってこれることができました。田宮を失った悲しみは私たちの心から消えることはありませんが、だからと言って私たちは前途に対する悲観も動揺もありません。以前にも増して固く団結し、田宮の意志を受け継ごうという私たちの士気は高いです。

これからも変わる事なく、私たちを導き、お力添えをお願いします。追悼會に参席して下さった皆様、本当にありがとうございました。心からの感謝を申し上げます。

1996年3月2日

死はすべてを許す。美化された伝説が巷にあふれ、「カクメイ」は歴史を
彩る一場のロマンチックな夢として祭壇に飾られ、やがては風化していく。

No.
Date

今こそ再び 白昼の頹廢から暗夜の自立へ パートII

1962年度生文学部 安西 清尚

かつて歴史上世界の至る所で多くの人民の血と犠牲の上に様々な「革命運動」があつた。そして今も尚、世界の様々な所で搾取と貧困、民族紛争と宗教対立によつて様々な闘いが行われ、今日の急激で構造的な地球規模の社会変化によつて、これらはとちまちの内に取り残され風化していく。

かつて「我々」60年代(前半)世代の「友人」であり、「同志」であつた田宮高磨や「我々」が生まれた60年代は、第二次大戦後の支配体制をめぐりる資を主義陣営対社会主義陣営の冷戦時代から第三世界人民の胎頭による三つ巴の階級対立の解代人の移行という激動の時代であつた。

「我々」は、これをもって世界革命がようやく現実化しつつあると期待し、先進国内部の武装革命派や世界の革命勢力と呼びし一挙に「世界革命戦争」を開始しようとした。その日本的実践が塩見孝也氏が提唱した「世界同時革命」論であり、その足かかりとしての「革命根拠地」論であつた。

田宮君を中心とした「ヨド号HJ紛争」はその第一弾であり、第二弾が重信房子氏を中心にいられた「アラブ赤軍」(後の日本赤軍)であつた。当時、「我々」の多くはその世界的実現についての信ぴょう性はとも角、少くとも自らの行動で革命の地平を切り拓くという一歩では基本的に賛同もし期待もしたのである。

だが残念な事、時は移り彼らの「革命的実践」は一場の「革命的ロマンチズム」として世界の変化の中で置き去りにされ一つの「伝説」として語りつかれてきた。

昨年末の「田宮、平壌に死す」の報は唐突に世界を駆け巡り、「我々」は彼の若さ、未完の雄図に較べてこの余りに悲劇的な終焉にかり然とした。そして立ち所々彼の死を悼み惜しむ声は様々な所で湧きおこつてきたのである。

確かに「タミヤ」「シゲノブ」は世界革命運動史上に極東の地ニホンからかけ昇つた星の一つとして刻まれるにふさわしい存在である。

だが、彼らを美化し、その想ひ出に浸るだけで「革命神話」は継承されるであろうか? ましてや彼らを追悼することによつて、自らの日常性、宣言なき車身を忘却し、歴史のゴミ箱に埋没している「我々」の日々が免罪されるのだろうか?

否、断じて否である。

彼らの「使命」は美化すべき対象として終焉したのではない。彼らの苦闘や革命への確信と献身は死して尚継続せんとし、今も尚「革命」を必要とし、貧苦と搾取と流血の果てなき茨の道を行んでいける世界人民の多くにとつては現実の蓮生年の一人である。

ことを求め読んでいる、ことを忘れてはなるない。

とりわけ巨大化した産業構造ばかりが社会深部に至るまで空洞化が進み、社会と相
の至る所で日本の歴史とかけあっている程の醜く非惨な日常が進行している「先進国ニッポン」
ことごとく「革命」を必要としているのではあるのか。(や事件)

「夕やけ」や「三ヶノア」が遠い異郷で「祖国を想う」と語る時、このような日本社会の閉塞状
況を世界革命の突破口として今一度日本の地に生きて闘い死すという痛切な祈り
がこめられているのではないだろうか？

たとえれば、今こそ「我々」がなすべきはなるないことは明かである。

それは世界と日本の現実を直視し、イデオロギー的な先験性を排し、断末魔の叫びを絶
ていく排金主義的社会的悪やみずみぞを人民・大衆の利益に沿って正していくこと。現実の中に、
人々の苦しみの中に生きて課題を見出し、今の世の中を根柢から作り変えていくことが始め
て21世紀へ向けて新たな「革命社会」の道筋と展望を具体的に作り出すことです。

この25年の間、田宮君(日本赤軍のアピール「田宮」も然り!)が異郷の「社会主義国」
の散しい現実と苦闘する人民の叫びの中で学んだことは、このような現実を直
視し、現実から出発して現実を変えるという「革命=天命を革める」ということではな
かったか。かゝる地平に立つた時、チソンの散しい現実とここから彼らが垣内見る
祖國ニッポンの余りにも醜悪な姿は、彼らにとっては絶望的なまでに大きな距離を
感じさせたのではないだろうか。

かゝること、祖国と祖國の人々を愛さうとすればその程、身に背負うもののあまりの
大きさに田宮高慶は心を痛め、身を削る苦闘の果てに急なる死に乗りこえ
たのではないだろうか。夕やけの死を誰よりも残念にくやしく思っているのは田宮君の人
だと思えてなるないのである。

思い返せば30年前、この大阪市大においてばかりに明かかたりつゝあつた知的支配体制
の岩タメカクとこれに業喰う千石モウリウの輩のすべてを敵に回して、数名の若者が
大学(祭)という醜悪な日常性と対決し、「白昼の顛覆」を打ち破り「暗夜の自立」を求
めて自己変革の道を求めんとした初心に再び立ち戻るべきはなるないのではないか？

この時、田宮が私に語ったコトバは「お前の言っていることは小おすかくてよう分らんか、
問題があると思えばやったらええ。要は真剣に革命をやることだ」であつた。

小児病的左翼では語り得ぬこの素朴で人間くさい(という)批評の仕方にこ
そ天啓の革命派である田宮高慶のおごり高ぶるが、奥直さと大胆で公正な判断力が
現表れているように、今となっては懐しく思い出される。

もって冥黙の碑となす。哀号!

かりはゆく

どこからきたか かりは ゆ
 くとおく ひがしの そらの は
 てそこく にほんに ゆくと き
 はおいら げんきと いいってく
 れたと え ひがたち さんが かわろ
 と きみ への おもい かわら な
 い かん よ

- 1、
 どこから来たか かりはゆく
 遠く東の 空の果て
 祖国日本に ゆく時は
 おいら元氣と 言いつてくれ
 たとえ日がたち 山河変わるうと
 君への想い 変わらない
 寒風ついて かりはゆく
 艶れし仲間を 背負い飛ぶ
 祖国の冬は 寒からう
 みんな仲良く 頑張らう
 険しい峰が いくつあるうと
 一つの心で 乗り越える
 厳しい冬は ながくない
 冬がすぎれば 春が来る
 芽ふき花咲く その時は
 みんなで共に 歌おおよ
 今日の涙 あしたの笑いに
 みんなで共に 歌おおよ
- 2、
 3、

田宮高晴 歌

氏は田宮高啓氏御尊父であられ、
朝日新聞歌壇で入選された歌のい
くつかを転載します。

春の夜の 夢に立ちたる 罪の子の

幼き顔よ 笑くぼすらみせて

古ゆ 帰らぬ子持つ 親はある

朧月夜に 弱法師謡う

牛を撫で 牛に舐められ 就職の

子は急かれつつ 集団バスに

過疎の村 溜池枯れて 草しげり

峠のかなた 雲の峰たつ

訪つねきて 窓の硝子の 雪拭けば

炬燵の団樂 つばらかに見ゆ

梅雨はれて 遠山とみに 明るめげ

降りしがごとく 托鉢僧立つ

サンダース ホームを卒業し 大き子ら

こもごも語る ママちゃんのこと

追悼会に集まって下さった皆様へ

「日本の自主と団結のために！」の会

友人、知人、仲間、同志の皆さん。

今日は田宮高麿同志の追悼のために、故人縁の地である大阪で、このようにも心のこもった追悼の会を準備してくださり、また、お忙しい中、遠路お集まり下さり、本当にありがとうございました。愛する祖国の地で、懐かしい友人、知人の皆さんに囲まれ、田宮同志も嬉しいことでしょう。これが生きての再会であったならどんなに良かったでしょうか。帰国の意志を更に固め、最悪の場合は監獄に入っても祖国の皆さんと合流し、日本の自主、民主、平和のための道を切り開いていこうと力強く語っていた田宮同志を思うと無念な気持ちを押し返さることができません。

田宮同志の生涯は、自己の全てを黙々と祖国と人民に捧げた生涯でした。田宮同志の一日一日はどうしたら一日も早く日本を自主的で平和で民主的な国にできるか、日本民族を自主的で平和な、そして皆が一つの家族のように結ばれた誇りある民族にすることができるかという思索に思索を重ねる日々であり、その理論を築き、実践に具現する日々でした。そこにあるのは、祖国日本に対する熱烈な愛であり、その運命に対する高い責任感であり、そのために自己を服務させ抜く徹底した服務精神、民族を破壊する帝国主義とその現代思想であるグローバリズムに対する憎悪と徹底した闘争精神でした。

田宮同志は最後のインタビューで「われわれの総括は、愛国、愛民、愛族の人民大衆の本心をどこまでも信じなけりゃならないということであり、それを信じ大胆に依拠して闘えば必ず勝利するということです。」と語っています。私たちは田宮同志が自らの半生の総括として遺したこの言葉を遺言として受け止め、自らの不動の信念とし、この前人未踏の愛国、愛民、愛族の闘いに自己のすべてを捧げていく決意です。

この25年間、私たちは田宮同志の導きの中で幸せで生きがいのある生を営んで来ることができました。私たちが悲しみや憂いというものを知らず、楽観と希望をいつも抱いて生き闘って来ることができたのは、田宮同志の大山のような不動さと大海のような広い懐があったからです。しかし、私たちは余りに

もその懐に甘え、田宮同志に負担をかけすぎました。田宮同志は祖国と人民に対する無比の献身性、服務精神の生きた模範を示し、私たちを人民のため、民族のために服務する人になれと導いてくれましたが、結局は私たちがその要求に応えきれなかったが故に、田宮同志にその負担を全部かけ、田宮同志の寿命をあのようにも縮めてしまったのだと思います。そのことを慚愧の思いで噛みしめながら、私たちは田宮同志が掲げた愛国、愛民、愛族の旗を固く握り、祖国と人民の真の服務者となっていく固い決意に燃えています。

今日、私たちがこうして耐え難い悲しみを乗り越え、力強く立ち上がることができたのも、皆様の暖かい励ましと田宮同志の遺志を継いでしっかり頑張っていて欲しいという期待と信任があったからに他なりません。悲しみと失意の底にあった私たちを皆様からの弔慰電文、手紙、電話がどれほど励まし力を与えてくれたか知りません。私たちはその恩を決して忘れることはないでしょうし、その恩に報いるためにも、皆様が期待し望まれているように、更に固く団結し、田宮同志の遺志を受け継ぎ、志半ばで斃れた田宮同志の無念を必晴らしていく決意です。

田宮同志の肉体はたとえ私たちの側を離れようとも、祖国と人民のために自己の全てを捧げ尽くし、真っ白な灰となった田宮同志のその生は、私たちの脳裏に焼き付き、私たちを祖国と人民に服務する真の生へと力強く導く永遠の財宝、力となることでしょう。

田宮同志を追悼するという一点で、各界、各層の思想、信条を越えた多くの皆さんによって持たれた今日の集いが、祖国日本の自主、民主、平和のための大きな一歩となることを願ってやみません。

今日は本当にありがとうございました。

1996年3月2日